「歴史に気候を読む」

吉野正敏　著
学生社，2006年６月，
197頁，2000円（本体価格）
ISBN4-311-20296-2

多くの資料・文献を渉猟し，又，常に現場に足を運び精力的に調査を行われる著者ならではの著作である．著者が「文化・社会・技術を主とするあらゆる人間の営みの歴史の中で，気候が関連している現象を探し出し，……」と“あとがき”でも述べているように，本書の対象は，時代は考古時代から第二次大戦まで，地域的には日本，アジアからヨーロッパを含み，テーマも，暦，戦争，航海，集落，遺跡，神話，民俗行事等々，大変広範囲である．これらに関係する多くの文献・著書を調査・分析し，独自の歴史気候の世界を提示している．本書はどこから読んでも楽しい話題が述べられており，時空を超えて，歴史気候学の世界に遊ぶことができるが，以下，順を追って，各章の内容について，評者の感想を交えながら紹介する．

第１章「古代中国の季節観」では，最近中国で完成した中国気象史の成果をふんだんに用いて古代中国における季節観の成立を分析し，紀元前８～３世紀に確立したとしている．これまでの書物に記述されている「ギリシャ・ローマ時代に気候や季節の認識が始まる」についても改めねばならないであろうと述べている．

第２章「古代中国の軍事気象」では，孫子などを例に，兵法と気象の関係を論じている．

第３章「日本の古代集落の変遷と気候」では，日本各地の古代集落の変化や古墳の分布と北半球規模の気候の温暖化・乾燥化した気候環境の関係を論じ，７～10世紀の温暖な時代と日本における古代集落の発展（立地の多様化）について，その関連を解明しなければならないとしている．また，北半球規模の気候の温暖化・乾燥化などの気候環境変化が，たとえば千葉県の台地上の農業生産体制に影響したかというような，局地的な影響評価について解明する必要があると述べている．これなどは全く今日的な課題である．

第４章「八世紀から十世紀の東アジアの気候」では，北半球の温暖な時代（８～10世紀）についての東アジアの気候を論じている．例えば，宮中の観桜宴の記録を分析し，この時代の３月の月平均気温が１～1.5℃高かったと述べている．また，日本史の専門家が遣唐使が季節風の存在を気づかなかった証拠としている文書について分析し，むしろ遣唐使は季節風の存在を十分知っていたとしている．さらに，万葉集の“露”の歌を分析し，日本人の環境の捉え方を分析している．一方，中国については，中国の東北部・北部と中部・南部の人口の相対的な多少関係と気候変化との関係を分析し，東北部・北部の人口が多かったのは比較的温暖な時代であり，冷涼で乾燥した時代には北方や西方からの遊牧民の侵入があったとしている．さらに，日本と渤海との交渉史，特に渤海使の航海の季節性を分析して九世紀後半から十世紀にかけての気候の急激な悪化と関連付けている．

第５章「ボロブドゥール遺跡と季節風」では，８世紀から10世紀の温暖化気候とその間に存在した短期間の気候悪化とボロブドゥールや渤海文化の衰退との関係を論じている．又，ボロブドゥール遺跡やアンコールワット遺跡の石の表面の彫刻文様を詳しく分析して，当時の気候知識やカンボディアとインドネシアの航海技術の差についても論考している．さらに，新しい視点として，アンコールワット遺跡の貯水施設としての役割やオアシス効果についても論考されている．この章には自ら現場で撮られた写真が掲載されており，著者の面目躍如というところである．

第６章「ヴァイキングと気候」では，ヴァイキングの活躍と気候の関係を論じ，さらに同時代の東アジアの諸国の勃興も論じ，世界史的には８世紀が重要な変動の時代にあたり，これには全球的に温暖な気候が関係していると述べている．

第７章「インドネシアの局地気候対策」ではインドネシア，ジャワ島東部のマジャパヒト王朝時代の石彫の模様を分析するとともに，旱魃対策のために掘られたと考えられる運河とそのオアシス効果などについて述べている．

第８章「海の民・日本人の気象・気候の把握」では日本における気象・気候の把握について論じ，「船行要術」を分析して，村上水軍を，「海上・沿岸の気象と地形の関係を記述した局地気候学の創立者集団」との見方を示している．さらに，江戸時代の北前船の運航記録を分析して，運航に及ぼす悪天の影響等を論じている．また，「静岡県水産誌」によって，静岡県下の風の小気候について紹介している．

第９章「川中島合戦の気象・気候」では，川中島の

© 2006　日本気象学会

合戦における気象との関係を以前の荒川の研究（お天気日本史）以来再考している．有名な霧は放射霧ではなく蒸気霧だったのではないかと述べている．日本の戦国時代は低温な時代であり，川中島の合戦は小氷期の前ぶれの時代に行われた．武田氏は領国支配において気象条件への対応・配慮においてまさっており，川中島では霧を有利に利用したが，長い目で見れば低温は不利な条件であったとしている．

第10章「都市の発展と大気環境の悪化」では，古代ローマから近代にわたって，都市における大気環境や都市計画について述べ，ヒートアイランドや風の換気効果ついて論じている．また，都市の大気環境を悪化させた背景として，17世紀から19世紀に向かって起こった小氷期の気候不順・冬の寒さなどがあったのではないかと論じている．

第11章「風の神話と風祭り」では，先ず日本各地に残る風祭りや風除けの祭祀，ヨーロッパの風の神について述べると共に，世界各地の風にまつわる神話を紹介している．

第12章「日本の風神・雷神とそのルーツ」では，俵屋宗達や尾形光琳が描いた風神・雷神図の由来について論考し，その源流を中国長安さらには敦煌莫高窟に求め，さらに西方に想いを馳せている．さらに興味深いのは，色々な風神・雷神図（像）が製作された時代が，温暖から寒冷に向かう時代から寒冷の底の時代であり，作者の意気込みを気候悪化がさらに鼓舞したと論考している．

第13章「江戸時代の科学・疫病の歴史」では，江戸時代の科学について「和漢三才図会」の記述を引用しながら，先に述べた「船行要術」との比較で，天気予報学の状況を論考している．また，流行性感冒の発症した年数を統計し，小氷期の寒冷化した気候条件が風邪の流行の素地を作ったとしている．

第14章「小氷期の日記から」では，江戸時代の旅行家で「日本民俗学の父」と呼ばれている菅江真澄の日記を引用し，局地風や雷を介してとらえた真澄の気候認識や科学水準が並々ならぬものであったことを述べている．

第15章「近世日本人の“気候”のとらえ方」では，江戸時代の日本人の気候知識について，元禄時代の町人文化の中で現われた気候に関するすぐれた観察や研究を引用しながら分析し，この時代には特に局地的な気候現象についての知識も増え，気候概念の形成に貢献した，としている．また，沖縄の各種資料を基に，季節認識や季節風，さらには干ばつなどを論じている．さらに沖縄で行われた外国船による気象観測が本土よりも早かったことを述べている．

第16章「上空の気流―近代史の一コマ―」では，第二次大戦中の上空の気流に関する話題を論考している．誰でも直ぐに思い出す風船爆弾についてはもちろん簡単に述べているが，ここではむしろそれ以外のもの，たとえば航研機 A-26による日欧連絡飛行の試みや，落下傘部隊によるパレンバン攻撃時の予報などの話題が詳しく述べられており興味深い．

第17章「気候の歴史と人間の歴史」では，まとめの位置づけで，これまでに発表された寒暖周期説について批判的に検討して問題点を示し，これらの説が受け入れられなかった原因を分析している．さらに，気候と人間活動の関係について，著者自身の見解を以下のように述べている．

○「人類文化の変遷が，気候条件のみで説明されるものでないことは明らかである．しかし，歴史時代の人類文化の変遷に，気候条件がどのような影響を与えたかを知ることは必要である．人間が社会生活を営む場合，気候環境が重要だが，その環境条件が限界に近い地域ではわずかの条件の変化が，非常に大きな意味をもつ場合がしばしばある．とくに東アジアでは，その北部で気候が寒冷化した場合に影響が大きい．」

○「地球規模で起る気候変動または気候変化は，人間活動とは無関係に地球が天体の１つとして存在するために起る．これが地域または局地的規模になる場合，人間活動との相互作用を生じる．つまり，地域スケール・局地スケールで人間活動との関係を考察しなければならない．」

著者は“あとがき”で，「本書が，日本における歴史気候学の芽生えになれば，望外のよろこびである．気候に関心をもつ歴史研究者，“気候”と“歴史”の両方に興味を持つ読者が，１人でも多くなることを願ってやまない．」と述べている．著者の見解にも述べられているように，地球温暖化問題における地域気候に対する影響把握や古気候の研究は重要なテーマである．将に温故知新である．本書がこのような最先端の研究に取り組むきっかけになれば，と思うのは評者１人ではないであろう．

（（財）日本気象協会　藤谷徳之助）